

「ようなんきっず」冬のフェスティバル

日 時：2007年12月16日(日) 9:30~14:30

(「科学実験遊び」は13:00~14:30)

場 所：陽南地域コミュニティセンター

(宇都宮市立陽南小学校内)

参加者：172人 子ども70人 大人102人

【男43人 女59人(コミュニティーセンタースタッフ30人・生涯学習課関係・青少年指導員関係20人・宇都宮大学学生ボランティア6人含む)】



陽南地域コミュニティセンター



9:30~11:30

コミュニティセンター独自事業

リース作り、凧作り、ウッディ・クラフトの講座

・5年前から、地域の子どものためにコミセンの事業として年2・3回イベントを運営

・宇都宮市で最初の「放課後子ども教室」受託団体

従来、「子どもの預かり」という意味合いが強かったので、今年度は親子で楽しめるような内容を導入→ 科学実験遊び



11:30~13:00

餅つき・トン汁(焼き芋)



子どもたちも餅つきに参加

おいしいトン汁
もできました!
(^_^)



完成した凧を揚げよう!

13:00 体育館で科学実験遊び スタート！！



博士！！

アインシュタイン博士！！

オープニング



怪しいアインシュタイン博士

えーっ！？
何で？

作ってみたいなあ…



不思議な壁



大きな声をだしてごらん！

音の不思議



浮沈子 浮いたり沈んだり



見える、見える！

コップに虹を閉じ込めよう！

うまく、バランスがとれない…^{^_^};

お父さん、がんばってえ！



バランスとんぼ

14:30 終了
再び、アインシュタイン博士登場で締めくくり

事務局より

- ・ 青少年指導員の方やコミュニティセンターのスタッフが、子どもたちの遊びの多様性を感じ、地域で子どもたちの育ちを支援するためのツールを得ることができた。
- ・ 青少年指導員と大学生が協力してそれぞれのコーナーを担当し、いろいろな世代が交わって活動できたので、大学生にとっても学びの場となった。
- ・ 大人の関り方について →「一緒に楽しむ」なのか？「手を出さずに見守る」なのか？それぞれに意味がある。

長野フォーラム

「地域で育つ子どもたち、大人たち」

—地域で育む福祉教育のつどい—

日時：2008年2月23日(土) 13:00~16:00

場所：長野市ふれあい福祉センター

参加者：130人 大人110人(男42人 女68人) 子ども20人

第1部 福祉教育情報交換縁日 —32ヶ所の展示ブースで情報交換—

「福祉教育」という大きな輪の中に、ボランティアに関わる小中高校・専門学校・ボランティアグループ・地域組織(施設)・企業などが一堂に会し、それぞれが地域の中で、どのように活動し、どのように子どもたちを育てているかについて、情報交換をした。

32ヶ所の展示ブースのうち、25ヶ所には、関係団体の方がいて説明し体験をする場にした。縁日のようなつくりのブースの中央にはこたつやテーブルが置かれまちの縁側のような雰囲気の中、和やかに情報交換が行われた。体験コーナーでは、お父さんたちの活動のメニューに活用してもらえるに準備した、綿菓子・ポップコーン作りが人気。



会場には団体名ののぼり旗がところせましと並んでいて、説明する人と聞く人。体験する人とにぎわっています。

まちの縁側にはコタツがよく似合う。
コタツにはみかんとトランプ。
まちの大人と自然に交流が始まって…



第2部 フォーラム「子どもと共に、ハイ！あなたの出番ですよ」

○麦っ子広場の合唱 「手のひらを太陽に」「しあわせの歌」「むぎっこの歌」

○活動発表 長野市立下氷鉤小学校5年倭組 「福祉ボランティア活動の実践」

○福祉ボランティアについて学んだこと

ボランティアセンター・地区社会福祉協議会

隣接の長野南高校の福祉研究同好会から、福祉体験について学ぶ

○福祉ボランティア体験

車椅子体験・高齢者介護福祉施設での交流

子育て支援事業の活動グループの親子と交流



○事例報告

井上 和美さん(NPO法人 麦っ子広場)

「障害児の歌声を子どもたちに届け、共感の輪を広げよう」

障害を持つ息子たちと親たちのために歌い始め、楽しそうに歌っていたら輪が広がった。今は60名ほどのメンバーが参加しているが、その人たちの笑顔を見てエネルギーをもらっている。

活動のためには父親を始め家族の協力が欠かせない。今は、「麦っ子」が小学校に行って歌うと小学生が共感し、感動してくれる。それが自分たちの果たすべき社会的な役割だと思っている。

吉澤 由紀子さん(宇都宮市陽南地域コミュニティセンター)

「地域のコミュニティセンターで子どもを育む」

今市市で起こった女児誘拐殺人事件や、保護者が登校中の子どもの列に車で突っ込むという事件があって、地域の安心安全や信頼関係の課題に直面する。

地域のコミュニティセンターの職員として、地域を愛する一人の住民として何が出来るか？と考えて、まず、大人が地域の子どもの顔が分かるようになるようにしよう。そのために子どもと遊ぶ機会を作ろうと思った。今年科学実験遊びを通じて大人と子どもが交流できるようにしよう工夫した。

霜鳥 和憲さん(長野市立下氷^{しもひ}鮑^{がの}小学校「^{かんな}鮑会(親の会)」)

「子どもと一緒にうさぎ小屋を作ろう」

「うさぎ小屋を何とかして欲しい」という子どもたちの願いを叶えるために、父親も母親も力を合わせ「親の会」として、子どもと一緒にうさぎ小屋を作ることにした。

思いのほか、多くの父親たちの協力も得られ、子どもたちと一緒に活動する中で普段よく知らない子どもたちを見ることもできた。

飼育委員会委員長の穂苺佳奈さん…うさぎが増えすぎ、けんかをして死んでしまったりして困ってました。うさぎ小屋を新しくして欲しい、という自分たちの願いをかなえてもらい、おかげでうさぎたちは平和に過ごしています。

【会場からの声】参加団体が地域で子どもたちの育ちを支えることにつながる活動について発言

- ・ 小学校の親の会として子どもたちを中心にした活動を目指したい。
- ・ 中学校では自分たちがどう生きるかを考えたい。そのために福祉を中心に学んでいきたい。
- ・ 車椅子に関するボランティアで障害者の手助けをすることから始め、車椅子体験の出前講座を通して地域の力で学校に協力をしていきたい。
- ・ 地域公民館でも、子どもを取り巻く環境を考える必要性を痛感し、親業に取り組んでいる。
- ・ 高校の福祉研究同好会の高校生も地域の小学生と一緒に福祉について学んでいる。
- ・ お風呂カルタを作り、市内全ての小学校・幼稚園・保育園に配布。企業も社会貢献をしている。
- ・ 企業でも地域を守る子どもの家や防犯パトロールの車のステッカーなどで子どもの防犯に貢献できる。
- ・ かつごう会(障害者登山支援)こまくさ(視覚障害者支援)朗読ボランティア団体などのボランティア団体も、障害者の支援だけでなく、学校の出前授業等子どもに関わる活動をしている。環境団体も子どもに伝えたいことがある。
- ・ おもちゃの病院でもおもちゃを大切にすることを育みたい。中学生のボランティアも受け入れる。
- ・ 学校としても「地域の教育力」の大切さを痛感している。「地域の先生」として地域の力を学校につなぎたい。

【まとめ】

コーディネーター 込山 哲也さん(市民活動支援ネットワーク)

- ・子どもが地域に出かけいろいろなことを学ぶ、地域の方が学校に来てくれて子どもと関わる、その出会いを繋げることが大切。
- ・子どもが大人を学校や地域に連れ出してくれることによって親が変わっていく。学校や地域の子どもたちの集まる場に大人が出かけていくことで親自身が気づくことがある。参加してみることで、初めて変わる。
- ・障害児の子育てにおいても両親がともに力を合わせて関わっていくことで活動の場が広がった、父親の参加が子どもたちの育ちの場を広げてくれる。
- ・障害のある人と小学生の交流の時間が大切。小学生の柔軟な心には、障害の有無より大切な人間としての生きている意味を共感することができる。障害者の団体の活動もで小学生がそのまま受けてめることができる子どもたちにとって魅力のあるものである。学校の先生の意識も出かけていってふれあうことで変わってきた。
- ・人と知り合ってつながりあって一緒になってやっていくという姿勢が福祉教育になる。
- ・人と人とが地域の中で繋がりあうことが必要。
- ・家族も地域もさまざまな人と関わることによって見えてくることもある。

事務局より

学校の中だけでの「教育」が完結するのではなく、地域に子どもたちが出かけて行ったり、地域の方が学校に入ることによって直接出会い、ふれあったり交わったりする。直接であることが大切。そのような場で大人も子どもともに学び合っていく。そのようなことが地域の中で「教育」が子どもに何かを一方向的に教えるということではなくて、「共育」＝関わりあった全ての人が「ともに育み合う」、ということを目指していくべきである。

城山小学校 わくわくまつり プチビジネス体験

日 時：2007年11月3日(土) 10:00~13:30

参加者：700人 子ども350人 大人350人(男150人 女200人)

内 容：従来PTA行事として、わくわくまつりを開催し、保護者が子どもたちを楽しませ、バザーや模擬店の販売によって収益をあげ、学校の備品購入等にあてていたが、今年度新たな試みとして、「子どもの健全育成」という視点を加えて6年生(52名)を対象に、「プチビジネス体験」を実施した。

まず、PTA会長よりビジネスの基本的な心がけや仕事をする上での姿勢などについて説明、その後、販売促進のためのポスター書き・商品陳列、役割分担などを行い、実際の販売体験を大人の人と相談しながら実施した。



城山小学校



わくわくまつり 準備中



ビジネスとは…心構えは…

あいさつなどのコミュニケーションが大切！



よく分かるようにポスターを作成



きれいに見えるように配置を工夫

バナナ買って下さい。



- ・ 小さな声が、どんどん大きな声になっていく。
- ・ 商品の説明をしっかりと。
- ・ まとめて買うと、値引きしますよ。
- ・ この場所が目立たないから、商品を持って売り歩こう。



- ・ おやじの会（中年1組）の方々は、恒例のクレープ作りで参加。
- ・ 準備の時間帯はお母さんたちが中心だったが、開会すると子どもを連れてお父さんたちがたくさんきて、人手の足りないブースのお手伝いなどもしていた。
- ・ また、子どもたちが自主的にゲームコーナーのお手伝いをする姿も多く見かけた。

子どもたちの感想

- ・ 始めて（の体験）で最初は恥ずかしかったけれど、楽しかった。
- ・ 思っていたより大変だったけど、売れるとうれしかった。
- ・ 自分だけで、〇〇円の売り上げだった。売れるとどんどん楽しくなる。
- ・ 仕事は大変だと思った。買ってもらうとうれしかった。

校長先生の感想

- ・ 当初、「儲ける」というイメージがあって抵抗感があったが、実際の生き生きした子どもたちの表情と、さわやかが準備した資料を見て、活動の意義と子どもたちが人の役に立つ喜びで表情を輝かせているのを見て、イメージが変わり、納得した。
- ・ 伝統を守りつつ、進取の気質を持つために、このような取り組みは大変意義深かった。

しもひがの

下氷鉤小学校 親子でうさぎ小屋を作ろう！

日 時：12月2日(日)・8日(土)・9日(日)・15日(土)・

16日(日) 9:00~16:00

参加者：のべ200人 子ども120人

大人80人(男40人 女40人)

協 力：プレンティ建設設計事務所

内 容：子どもたちの願いから始まった。



下氷鉤小学校

「私は、飼育委員の委員長の穂苅加奈です。…飼育小屋では、うさぎがいっぱい増えてしまって、その中にはオスも産まれてしまいました。…また、産まれてもとても困ります。なので、ぜひ小屋を作ってください。小屋を作る時に、うさぎのことを思って作って下さると嬉しいです。ぜひお願いします」

「私は今の飼育小屋を見てすごくひどい状態だと思います。チャボの中にうさぎがいる小屋、えさを置くところも散らかっているし、ふんのおいなどもして、とてもかわいそうだと思うし、アスファルトの上にある小屋も夏は暑くてたまらないだろうと思います。それに、掃除する道具も散らかしっぱなしです。…そういう状態なので、住み心地のいい小屋して欲しいし、全校のみんなからも愛される、そんな飼育小屋がわたしはいいと思います。…清潔な飼育小屋がいいと思います。」



PTAと飽会(おやじの会)で「何とかしよう!」と立ち上がった。

- ①子どもたちからのメッセージを地域に発信し、里親探しと建設関係者の協力を募る(市民新聞・ボランティアセンターの広報誌・HP等)
*子どもたちの作文を読み、実際に見学してうさぎ小屋のコンセプトづくり
- ②子どもたちにうさぎ小屋の設計図を書いてもらう。
- ③建設については、旧うさぎ小屋のリフォームもあわせて行う。また、学校の不用品やリサイクル品や手作りのものを使うように工夫しコストを下げ、多くの人の手を借りて作ることを目標にする
- ④全校にPTA・飽会から「親子でうさぎ小屋を作ろう!」の呼びかけ
- ⑤完成した時に落成記念としてうさぎをよく知るためのイベントを企画する

リフォーム中
ビフォー



新築部分



ペンキ塗り初めて
(..)



小さな大工さん



おしゃべりに花が咲き、ついつい手元がおろそかに…

**完成間近！
大人と子どもが力を合わせて**



落成式 うさぎの飼い方について



感謝状！
楽しくうさぎ小屋を作れました



事務局より

- ・大規模なものづくりという点で、大人も子どもも作り上げる楽しみや、みんなで協力し合うことの大切さを感じることができた。
- ・普段経験したことのない、大工仕事を基礎から体験できた。子どもだけではなく、お父さんたちにも新鮮。(特に、父親の自信回復)
- ・子どもにできる仕事があり、自分たちの仕事の痕跡を確実に刻むことができた喜びがあった。
- ・「こういうことこそ、必要な教育」ということばが出てきた。子どもの学びそのものをガイダンスから学校の先生が気づく。
- ・「うさぎ小屋作り」を通して、「人とのつながり」作りをする。
- ・大人の感性・気づきがスタートになった。子どもたちの発想を尊重し、子どもたちの感性をきちんと受け止めることができる感性豊かな大人づくりが感性豊かな子どもづくりにつながる。

和歌山フォーラム

「子どもの育ちは地域みんなで」

日 時：2007年10月21日(日) 13:30～16:30

場 所：和歌山市中央コミュニティセンター

参加者：70人(男25人 女45人)

当日は、絶好の秋晴れ、和歌山城での大イベントをはじめ、和歌山市内あちこちでお祭りや団体のイベントがあり、集客が難しい状況にあったが、実行委員のみなさまの努力のおかげで、70名もの皆さまにお越し頂き、地域で子どもを育てる大切さについて有意義な会をもつことができました。

第1部 基調講演:「子どもの育ちは地域みんなで」

田中雅文さん(日本女子大学人間社会学部教授)



子どもの社会性を育てるためには、体験を積み重ねたり、思いっきりぶつかってみたりという経験が必要。現在の社会の中では、そのような経験をする機会が少なくなってきた。自分自身を家族や友だち、地域の大人にぶつけてみる、あるいは身近な自然環境にぶつけてみる、そのはね返りから子どもたちは多くのことを学ぶ。そして、社会の中、環境の中での自分というものを確認する。そういうプロセスが大切である。社会性が大切だという前に、

そのもとになる“自分自身”というものが、子どもの中になくなっていくという感じがする。まずは、「自分とは何かを知り、自身を見つける」ことから始まらなければならない。

子どもは自分自身の欲求、欲望を思いっきりぶつける所から社会性が身についていくということを大人は理解しておかなければならない。昔はケンカやいさかいの中で、手加減することや人が嫌がることをしてはいけないということを学んできた。最近の子どもはケンカをしない。自分自身をぶつけ合って学んでいく機会がない。社会性を育む機会を失っている。率直な欲望の出し合い、受け止めあいがなくなっているのは問題である。



親と子の関係を見てみると、自分のイメージ通りに子どもが育っていないと、子どものありのままの姿を受け止めることが難しくなっている。親から受け止められていないとか、家庭の中で、愛情を持って抱擁されていない。そういう子が学校へ行って甘えて問題をおこしている。家庭が欲望をぶつける場になれないということが、困難の原因になっている。昔は大家族だったので、一人ひとりにかまっていられなくて、適当に欲望を発散したけれども現在は少子化、核家族にあって、子どもの進学等の問題もあり、子どもが思いっきりぶつかる対象がないというのが現実である。だから、地域の方々とふれあいの中で、エネルギーを思いっきり発散する場が地域に用意されて

もいいのではないかと。自分自身の心が空洞化している中では、いくら正義感や公共性を叫んでも、現実には難しい。自分の心を満たすチャンスを与えることが大切。そういう場として、子どもと大人が交わる地域の場は有効である。大きな理想を掲げなくても、子どもと思いっきり暴れたり、好きなことを言ったり、大人にぶつかっていったり、そういう場を与えていってあげるのが大切。そういうことを通して、子どもが自立していく基礎ができていく。



大人自身もこういう活動をすることで、子どもからいいものをもらっている。地域のお年寄りが子どもと接して表情が軟らかくなった事例もある。大人がいきいきとなる効果がある。大人自身が癒されたり、成長のきっかけとなったりする。「学校は大人にとっても大きな学びの場なのですね」という参加者の声も聞かれる。子どものためにやっていることが、実は自分自身の成長につながっている。自分の生きがいであったり、地域の人間関係を広げる場であったりする。

子どもの社会性を育てていくためには、斜めの関係を作ることが大切。親子の縦の関係ばかりでも、同年代の子ども同士の横の関係ばかりでも不十分。地域の大人やお兄さんお姉さんさんとの関係まで広げていく必要がある。また、ふれあいを深めていき、地域の中で固有名詞の関係を作ることが大切。

個人個人の生きがいも大切であるが、同時に地域のこともみんなが考えて、それなりにつながりあって、個人を尊重しながらつながりあって、新しいコミュニティを作って、その中で子どもたちの生活環境を整えていくのが大切。社会関係資本を豊かにしていくことが大切。新しいつながりを作り、そのつながりの中に子どもを置き、そのつながりの中で子どもを育てていく必要がある。そういう中で社会性が育っていく。つながることの喜びをもっと味わう機会を増やすことが大切である。

次に、主体性をもった子どもを育てるために、子どもの参画も大切。子どもが楽しませてもらっている段階(参加)から、次の段階への移行が必要。子どもたちの意見を聞き、相談しながら、進め

る(参画)。自分自身が提供者になり、意志決定していくことで、主体性が生まれる。さらに、専門的な技術を入れることで活動の質が高まる。



紀州よさこい踊りを披露
木本小学校の子どもたち
“きもとぐみ紀燃組”35人。

第2部 事例紹介とパネルディスカッション:

島 久美子さん(和歌山県NPOサポートセンター長)のコーディネートで、4人のパネリストから写真で活動内容を紹介、それによって子どもたちや大人がどのように変わってきたかを討議された。

坂下 裕美さん(木本小学校区子どもセンター)

4人の母親でながく木本小学校のPTAや地域でいろいろ関わり、さわやか子ども広場でもお手伝いしてきた。自家の農地を子どもたちの稲作や芋作り体験に提供し、和歌山のイベントになった紀州よさこい踊りを指導し請われて老人施設も訪問した。

子どもたちはこれらの体験で達成の喜び”を実感できた。自分らの植えた米や芋の収穫、すずめ対策で作った50体の案山子、自分らの踊りにお年寄りが感激してくれることで、「達成感」をもつことができたようだ。

村崎 隆志さん(和歌山工業高等学校)

現在工業高校の教師ですが、昨年まで、3年間きのくにふれあい子どもセンターの“スペースいばしょ”の事務局として地域のNPOや趣味の団体の協力で子どもたちにいろいろの体験をさせることができた。

地域にはすばらしい人材がいること知った。大人は最初は「子どもに教える」つもりであったが、次第に子どもから受ける刺激が多くなり、変化していった。

土橋 進さん(きのくにプレーパークの会)

和歌山放送に勤務するかたわら、プレーパークの運営と見守りに当たっている。子どもたちには大いにネイチャーゲームや冒険遊びをしてほしい。

はじめ子ども用にいろいろ遊びのプログラムを準備したが、子どもたちは「木登り」「手製ブランコ」に興味をもった。子どもには冒険と危険遊び、自己責任での体験を推奨したい。

白坂 登志子さん(雑賀崎小学校放課後子ども教室)

雑賀崎小学校で“放課後子ども教室”安全管理員をやっている。週3回、150人の児童のうち常時30人ぐらい参加している。自由遊びの場だが子どもたち同士の挨拶や教え合いの習慣を根付かせたい。次第に「挨拶励行」と年長やできる子が「教えあう」雰囲気になってきた。子どもは地域の人に教えてもらおうと、迎えに来た親にそれを報告するなど変化が見える。



田中教授のパネルディスカッションまとめ

1. 大人が自分で楽しいことをやって、子どもたちを巻き込むことでいきいきとした体験になる。
2. 子どもの“達成感”“やり遂げ感”子ども自らの自己評価が自信になる。
3. 大人は、子どもからの「はねっかえり」で成長できる。昔は「大人は教える」だったが、現代は大人自ら「子どもの変化」に応じて変わる必要がある。
4. 「つながり」の大切さ。縦(親子)のつながり、横(同学年)のつながりだけではだめ。斜めのつながり(地域の大人と子どもたちの関係)が子どもを動かす。今年の「国民生活白書」の今年度のテーマが「つながり」。社会はつながりを必要としている。
5. かつての共同体には「自生的」な教育の仕組みができていた。ところが、明治維新からは「学校教育」中心。これからの社会では、「学校教育」「知識習得」まかせでは無理。子どもの育成の原点は、地域の営み。地域共同体による自生的教育の再創造が大切になっている。

事務局より

地域には、子どもの健全育成に関わるいろいろな団体や組織があるが、横の連携や人材の活用ができていない。その意味で、このようなフォーラムを繰り返すことで、お互いの刺激になるのではないか。アンケートのなかで、パネリストの紹介した活動をもうすこし知りたいとの意見があった。

遊びの体験会 in 雑賀崎小学校

日 時：2007年12月9日(日) 10:00~12:00

参加者：65人 子ども40人 大人25人(男5人 女20人)

和歌山の場合には、実行委員会の話し合いの中で、「父親参加」という言葉を表に出しすぎると、地域の参加の意味合いが薄れてしまうのではないかと考え、「地域のみんな」を強調する形で進めることとなった。また、言葉の面で、「フォーラム」という言葉は定着しつつあるのでそのまま使用するものの、「ガイダンス」という言葉は、一般的に定着していないので、「体験会」という言葉を用いることとした。各コーナーの指導に当たられた皆さんは、いずれも和歌山市内で趣味やボランティアの団体の方々である。



お手玉で遊ぼう

(ななこの会)

「ななこの会」の方のご協力で、お手玉遊びをした。いろいろなお手玉の種類や遊び方を体験できるコーナーもあった。針金ハンガーとストッキングで作った手作りのラケットでバドミントンのようにして遊ぶ遊び方では、子どもも大人も大はしゃぎであった。

マカロニ・アートを楽しもう

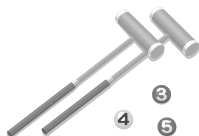
(子どもNPO)

形も色もさまざまなマカロニを使って木製のプレートに文字を書いたり、絵を描いたり……。子どもの自由な発想で素晴らしい作品ができた。



囲碁ボール (和歌山創造クラブ)

囲碁ボールは囲碁とゲートボールがくっついたような知的ゲームである。小さい子どもでもできる手軽なゲームだが、意外と大人の方がはまってしまったようだ。



クリスマスツリーを作ろう (健康生きがいつくり座)

工場からでる廃品を利用してクリスマスツリーをつくった。クリスマスに向けて、オリジナルMYクリスマスツリーを手にした子どもたちは満足そうに抱えて帰った。

感じてみようお年寄りの気持ち (WACわかやま)

関節を固められ、おもりをつけ、視力を落とすめがねをかけ、耳栓を付け・・・。「こんなに重いの？」子どもたちはお年寄りの生活が大変なことを疑似体験し、お年寄りに優しくしようと話していた。



事務局より

子どもも地域のみなさんも、いきいきとして遊びを楽しんでいた。子どもと地域の方、地域の方同士のコミュニケーションが高まっていった。

地域が関わることの楽しさを知るきっかけとなった。今後、継続的に行うための工夫が必要である。

遊びの体験会 in 貴志南小学校

日 時：2008年1月26日(土) 10:00~12:00

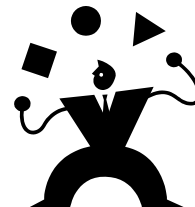
参加者：141人 子ども83人 大人58人(男24人 女34人)

和歌山では2回目の遊びの体験会となった。校長先生はじめ先生方、教育委員会の方も参加され、大いに盛り上がった。貴志南小学校は規模が大きいため、参加者も141名と多かったが、特に大人の男性が多いのが目についた。お父さんたちも子どもたちと一緒に楽しんでいた。プログラムとしては前回の雑賀崎小学校と同じだが、どのコーナーでも人数が多いために、待ち時間ができるほどのにぎわいであった。



お手玉で遊ぼう

お手玉の一般的な遊び方もやっていたが、学年をこえて、お手玉対決をするゲームもあった。こちらの方では、NPOの方が審判になって、子どもたちも大いに盛り上がっていた。

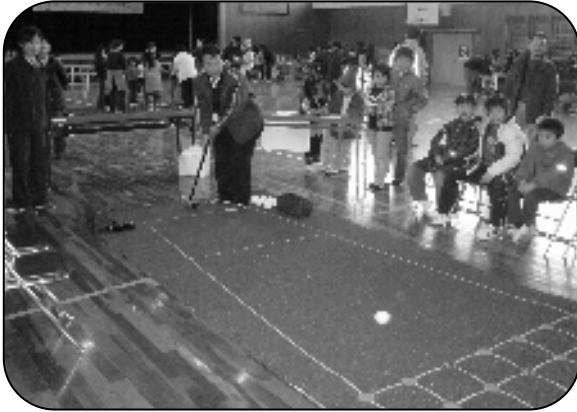


マカロニ・アートを楽しもう

マカロニを使って、動物の顔を作ったり、かわいらしい壁掛けを作ったり、中には、立体的に手前に飛び出している独創的な作品もあった。



左は作品のひとつ



囲碁ボール

大人も子どもも、思わず熱中してしまう囲碁ボール。今回も行列ができた。待っている人も見物の人も、プレイヤーの一打一打に固唾をのんで見守っていた。ねらったとおりに玉が転がった時には大きな歓声があがっていた。見た目以上に難しいという感想であった。

段ボールアート

今回はお父さんたちの出番が多いようだった。段ボールを家に見立てて、屋根に色をつけたり、煙突を付けたり、子どもたちと一緒にデコレーションを楽しんでいた。中には、家の内装まで手を加えている人もいた。



感じてみよう お年寄りの気持ち

「指が動けへんやん。」「力が入らん。」などの子どもの声が聞かれた。ペットボトルのふたを開けるのも、階段を上り下りするのも、普段は何の気なしにやっていることが、こんなに大変になるんだと身をもって体験し、お年寄りへのいたわりの気持ちをより一層強めていた。

事務局より

和歌山には寒さが厳しい一日となったが多くの方にお越しいただき、地域のふれあいの場となった。保護者、地域、学校が同じ立場で子どもと交わる機会となり、とてもよかった。地域の方も学校も、今後もこのような活動が続くことを期待しているとのことであった。

高知フォーラム

「子どもの育ちは地域みんなで」

日 時：2007年12月8日(土) 13:00~15:30

場 所：アスパル高知

参加者：50人(男23人 女27人)

第1部 講演「子どもの育ちはみんなで」

阿部 進さん(横浜子ども支援協議会会長)

カバゴン先生こと阿部進先生。阿部先生は、横浜市で平成4年から始まったはまっ子クラブの取り組みから放課後の子どもの居場所づくりに参加。

秋田県が今年4月の学力テストで全国1位をとった理由について、「ゆとり教育」の取り組みで放課後の子どもたちに丁寧に対応したことが大きいと話す。

放課後は、授業の終わった低学年から先に遊びに参加してくるが、1・2年生の“1人遊び”が、3・4年生が入ってくると“群れ遊び”に、そして、5・6年生が入ると“集団遊び”になり、縦割りで遊ぶようになる。5・6年生の参加が大事な鍵になるが、これが難しい。子どもたちに魅力のあるテーマを設けることが大切であると話す参加者が大きく頷いていた。



第2部 パネルディスカッション～子どもといっしょに遊ぶ～



最初にそれぞれの団体の活動紹介。
ふあーまー土居さんの軽妙な司会
に話が盛り上がる。



○事例紹介

大谷 清さん(一ツ橋小学校週末支援実行委員会)

さわやか福祉財団の「さわやか子ども広場」に参加して、昨年度は、週末を利用して、年間約20回の行事を実施しました。例えば、「見つけよう 久万川沿いの春の草花」、「子ども110番さんを探せ」、「万華鏡とカッコウ笛づくり」、「親子でカヌーに挑戦」、「親子釣り大会」「親子で地引き網を引こう」などです。20名から40名程が参加してくれています。

異年齢の児童が、1つのイベントに参加することから、上級生が下級生の面倒を見る光景が多くなりました。子どもたちは、私たちと顔見知りになって、通学路などでよくあいさつをしてくれるようになりました。大人は、親同士やスタッフと子育ての悩みなどを気軽に話す場面も多く見られるようになりました。



関田 浩美さん(高知市小中学校PTA連合会)

活動としては、連合会としての情報交換・意見集約や行政組織・教職員団体・地域団体との連携・協調・交流、県P・日P活動への参加などなどありますが、PTA会員相互の連携と交流を図るための事業として市P連体育大会の開催なども行っています。

取り組みの中で、PTA会員相互の連携や親睦が図られ、情報交換ができ、交流の場ができている。親子のふれあいの場をつくり、子育ての支援ができ、子どもたちの自主性や社会性を育てることができていると思います。

今後の課題としては、学校、保護者、教職員の意識や地域の皆さんの協力が格差があることです。子育てに関わる大人たちの教育が必要です。子どもと楽しみながら活動を行い、学校・家庭・地域の連携を深めていくことが大切です。教育行政や地域団体との連携を図りながら、情報の収集・発信をして子育てを支援をしていきたいと思っています。